

目から熱いなみだがこぼれそう。でも、泣くもんか！ 自分のことをかわいそうな子だなんて思わない！ 頭の右半分は毛がなくなつて！ ママがここにいてくれたらどんなにいいだろうと思つたつて！ おばあちゃんがわたしをだきしめて、「会えてうれしいよ」つていつてくれるまでにどんなに長い時間がかかつたつて！

「ここにいるんだよ」おばあちゃんはそのうと、棧橋を歩いていつて、数人の男の人にさしずしている。わたしが持つてきた大きなトランクが気に入らないんだ。あとで荷車にのせて運んでもらい、お礼をしなきゃならないから。

おばあちゃんは、わたしが荷物だつていつてゐるんだ。

だきしめてもらいたいなんで思つちやだめ、インゲ・マリーア・イェンスン！

船で見かけたおじいさんが、ヤギに綱をつけて通りすぎていく。ヤギがわたしにメエーと鳴く。「おいしい昼ごはんをありがとう」つていつてゐるんだ。でも、わたしは怒つてゐるから、「どういたしまして」なんて絶対いわない。

すると、おじいさんがヤギをしかつた。あのヤギもわたしと同じようにひとりぼっちでさびしいのかもしれないな。だつたら、許してあげる。

「楽しい夜をすごしてね！」わたしはヤギに手をふつた。

